



小沼丹作品集
IV

小澤書店



小沼丹作品集Ⅳ

定價三八〇圓

昭和五十五年六月三十日 初版發行

著者 小 沼 丹

發行者 長谷川郁夫

發行所 株式會社小澤書店

東京都千代田區富士見二―五―十二 郵便番號一〇二

電話 東京（〇三）二六三―九二一八（代表）

印刷 精興社 製本 大口製本

裝釘 山高登

© T. Onuma, 1980 Printed in Japan

目次

更紗の繪

7

椋鳥日記

ウエスト・エンド・レイン

クラブ・アツプルの花

テムズの灯

アダムとカルメン

299 277 256 235

移民局と齒醫者	319
老人の家	339
緑色のバス	366
落葉	386
解題	408

小沼丹作品集

Ⅳ

更紗の繪

I

吉野君一家が、その學校の建物のなかに住むやうになつたのは、戰爭の終つた翌年の春からである。戰爭の終つたとき、吉野君は信州にゐた。中央線と信越線に挟まれた中間の平地にある村で、村の傍を千曲川が流れ、田毎の月、の段段になつた水田の見える村である。

吉野君は戰爭の終つた當座、將來のことなど一向に考へなかつた。何やら昂奮して、それからぼんやりして過した。しかし、疎開先の信州にいつ迄もゐる譯には行かないから、細君と當時まだ満二歳にもならぬちつぽけな女の子を連れて東京に戻つて來た。

汽車が上野に近附くにつれて、吉野君は東京が悉皆焼野原になつてゐるのに吃驚した。その焼野原に、點點と灯が疎らに散らばつてゐるのを見ると涙が出さうになつた。理由はよく判らない。

東京に戻つて來た吉野君一家は、取敢へず細君の實家に落着いた。吉野君はその近くに家庭を持つてゐたのだが、吉野君の細君と赤坊が信州に行つてゐる間に、その家が爆彈にやられてしまつたのである。何とかなるだらう、吉野君も細君もさう思つてゐた。

吉野君の細君の父親は學校をやつてゐた。ところが、その學校と云ふのが、郊外の大きな飛行

機工場の近くにあつたため、空襲で數發の爆彈を食つて潰れてしまつた。無論、戰爭中はとも再建の希望など無かつたが、戰爭が終ると、細君の父親は早速再建に乗出した。その邊の詳しい経緯は判らぬが、兎も角、新しい校舎を建てることなど考へられぬ時世だつたから、出來合の建物を手に入れなければならない。

その結果、或る建物を買入れて、戰爭の終つた翌年の四月から開校する段取になつた。

——どうだらう？

或る日、細君の父親は吉野君に云つた。

——何ですか？

——君はうちの學校を、手傳つて呉れるかね？

——それは喜んで手傳ひますよ。

信州に行く前も、吉野君は學校に勤めてゐたのである。

——それで、中學の主事になつて呉れるかね？

——何ですつて？

吉野君は面喰つたが、細君の父親は、再建した學校には最初身内の者が主事とか何とか責任ある地位にゐた方が萬事に都合だと云ふのである。尤もな話だから、吉野君は承知した。

——何とかやつてみませう。

當時吉野君は二十六、七歳だつたらう。

その結果、吉野君一家はその學校のなかに住むことになつたが、その建物と云ふのがひどかつ

た。それは前に云つた大きな飛行機工場の工員寮だつた建物で、戦争が終つてからずっと放つたらかしになつてゐたから、荒れ放題である。

その建物を見に行つて吉野君は想ひ出したが、昔はその建物は小川沿の小徑から見ると、茂つた樹立越しに洒落た感じがしたものである。小川には水車が廻つてゐたりして、吉野君はわざわざ散歩に行つたこともある。ところが、今度來て見ると、小川沿の樹立は悉皆伐られてしまつて、洵に殺風景である。水車も無論跡形も無い。そこに、荒れ果てた建物が竝んでゐるのを見て、吉野君はがっかりした。

——こんな所を學校にして、生徒が來るかしらん？
と思ふ。

尤も、吉野君が見に行つたときは、必要な建物だけは改修工事が終つてゐたから、それは一應恰好は附いてゐた。しかし、それは一部に過ぎなかつたから、全體として見ると、とても學校には見えない。

木造の二階建の長い建物が、五列に竝んでゐる。何れも中央が階段で、二階に五間、階下に四間廣い部屋がある。これを適當に教室に改造するのである。その隣に矢鱈に大きな建物があつて、これは工員寮だつた頃の講堂兼雨天體操場である。その向うに、矢張り前と同じ建物が五列竝んでゐる。この裡必要なのは、最初に云つた五列の建物の前から第三、第四、第五棟の三棟に過ぎない。ところが、どう云ふ料簡か、細君の父親は最初の五棟と體操場迄はいいが、その隣の五棟迄買つたのである。飛行機工場の上役に知合が多かつたから、特別に計らつて貰つたのだらう。

何れにせよ、必要な三棟は改修工事を施されたが、その他の奴は舊態依然である。無論、窓硝子は一枚も無い。硝子ばかりではない、窓枠すら無い。床板も剥ぎ取られて無い。あちこちにぼろぼろの畳が積んである。驚いたことに、電氣のコオドも無い建物もあつた。放置してあつた間に盗まれたのである。

門はちゃんとあつた。石の立派な奴で、これには流石に泥棒も手を附けなかつたが、門の木の扉は跡形も無い。

——ひどいものですね。

——うん、ひどいものだ。人心もこれ迄荒んだかね……。これでこそ教育の意義があるのだ。

と細君の父親が云つた。しかし、吉野君はそんなことより、改修工事をした三棟の前に汚い二棟が残つてゐるのが氣になつた。門を這入ると先づ眼に入るのは、おんぼろの建物である。右手の雨天體操場もおんぼろだが、これは早急にはどうも出来ない。しかし、前の二棟は早急に片附けた方がいい。

——前の二棟はどうかしなきゃ不可ませんね。

——さうだ、あれを取つて、あの跡を運動場にするのだ。

——早く取壊したらいいでせう。

——いやいや、あれは賣るのだ。

——賣るんですか？

——ああ、三口あるので、どれにしようかと思つてゐるところだ。

——はあ？

吉野君は呆れた。こんなおんぼろの建物を買ひたい者がある、而もそれが三口もあると聞いては開いた口が塞がらぬ氣がした。ところが、事實は、前の二棟の建物が賣れて、それが教室の改修費を拂つてまだ餘つたと云ふから、吉野君は驚いた。多分、その頃は物價が矢鱈に上つてゐた頃だから、そんなことになつたのだらう。話に聞くと、その二棟を買つたのはどこかの學校で、それを持つて行つて校舎を建てたと云ふ。

現にその年、吉野君は或る大先輩を介して、卒業した母校のX大學豫科の講師にならぬかと云はれたが、そのとき、その豫科の教授はその話が終ると、かう云つて吉野君を吃驚させた。

——あなたの奥さんのお父さんは學校をやつてをられるさうですね？

——はあ……。

——そこに五棟、使はない建物があるさうですが……。實は、われわれの所も空襲でやられて校舎がありません。現にこの通り、他の學院の建物に間借りしてゐる状態でして……。

——成程。

——そこに引移らうと云ふ案があるが、どうでせう？

吉野君は啞然とした。母校たる天下に名の通つた大學の豫科が、あんなおんぼろ建物に来るかと思ふと、何とも情無かつた。

——あれは駄目でせう。

——駄目と申しますと……。

——とてもおんぼろで……。

——いや、それは手を加へますから。

——手を加へても駄目でせう。

——それはどうですかね……。兎も角、一度下檢分に伺ふ心算です。

——駄目だと思ひますが……。

これは口には出さずに、内心呟いたのである。

ところが、その教授は實際にやつて來た。吉野君は細君の父親に任せて、一切關係しないことにした。この話は結局流れたが、その理由と云ふのを聞いて吉野君も考へ込んでしまつた。

——何しろ、不便なもので、われわれとしても考へてしまひました。あれがもう少し驛から近いといひんですがね。

——ぢや、建物の方は……？

——建物はあれで申分ありません。

吉野君の義父もそのおんぼろを改修して學校をやることを考へれば、X大學の豫科が來ても一向に不思議ではない。しかし、吉野君にそれが情無いと思へたのは、吉野君がその頃の建築關係の事情を全く知らなかつたからだらう。寧ろ、吉野君の細君の父親は先見の明があつたと云ふべきかもしれない。序に云ふと、それから一年ほどして、隣の五棟の建物は或る大學が買取つて、その豫科の校舎になつたが、その金額はその土地と建物全部を買つた金額の數倍のものだつたのである。